
素直になれなくて

アンゴル・モア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

素直になれなくて

【Nコード】

N0845BA

【作者名】

アンゴル・モア

【あらすじ】

蘭と新一はトロピカルランドでデートをする予定だったが、高木刑事からの電話で行けなくなってしまった。

蘭は『事件だから仕方がない』と想いつつも、なかなか『素直』に為れなくて!?

はじまりはこれから（前書き）

新蘭です！まだ始めたばかりなので、上手く書けませんが、

頑張ります！

はじまりはこれから

今日、私は新一と喧嘩をした

今日は新一と久しぶりに

トロピカルランドに行く予定だった

私は

ずっと楽しみにしていた

新一と一緒に居られると

思ってたのに

新一の携帯が鳴るまでは

プルルル…

プルルル…

新一の携帯が鳴った

（電話？誰からだろう…）

この時は

思いもしなかった

まさか、

新一とトロピカルランドに行けなくなるなんて

携帯のディスプレイを見て

新一は嫌な予感がした

もしかしたら

蘭とデートに行けなくなるかもしれない

電話の相手は

高木刑事からだった

ピッ

『はい。工藤です』

『あつ工藤君？高木だけど実は…』

高木刑事の言いづらそうな声がした

高木刑事は二人がトロピカルで

デートすることを知っているからだ

（高木刑事？また事件かな？）

高木刑事から電話という事は

もしかしたら、新一と

トロピカルランドに行けなくなるかもしれない…

いや、今日きつと行けないだろう

蘭は

俯
い
て

た
だ

笑
っ
て
い
た

悲
し
く

はじまりはここから（後書き）

感想・ご意見

何でも書いて下さい！！

わがまま（前書き）

蘭の気持ち

わがまま

『はい』

『わかりました！いえ、大丈夫です！また今度行きますから…』

グサッ…

蘭は心に何かが刺さったのが
わかった

そっか…

仕方がないよね…？

新一は

『探偵』なんだし…

ズキン…

何時呼ばれても…

ズキン…

おかしくないよね

ズキン…

あ…れ？

何でだろう？

心では

分かってるはずなのに…

何で涙が流れて来るんだろう…

『蘭』

『わりい…』

『行けなくなっちま…蘭？』

グズ…

グズ…

駄目…

泣いちゃ…

ほら、

蘭！あなたのせいで

新一が

困ってるじゃない！

だが

涙は

止まるどころか、

溢れて来る

事件さえ起きなければ、

新一と一緒に居られたのに

事件のバカっ!!

事件なんて…

大っ嫌い!!

『……』

『蘭?』

『新一のバカ!!』

『?』

『…新一…』

(違う…)

本当は

こんな事が言いたいんじゃない…

本当は

『事件だから、仕方がないよ!』とか

『新一のせいじゃないから気にしないで!』
って言いたいのに…

私の心は

素直になれない

気がついたら

私は

パ
ア
ア
ン
…

新一の頬にビンタしていた

『！？』

新一は

叩かれた左の頬に手を当てながら

呆然とした表情で

蘭を見た

『らん…』

新一の頬は叩かれた衝撃で

赤く膨れている

わがまま（後書き）

感想・ご意見

お待ちしております！

感情の念うままに（前書き）

続きます。

感情の念うままに

『…蘭？』

新一は

戸惑いを

隠せないでいた

蘭が

自分の頬を叩くとは思わなかったからだ。

『新一は』

私なんかより…。

事件の方が大事…何でしょ！？』

駄目…こんなこと

言いたくないのに…

心では思っていないことが口から出てくる

『なっ！？』

突然

蘭が言った発言に

新一は

思わず

声を出した

『グズ…グズ』

蘭は泣いていた。

『バカ!!』

『んなわけねえーだろ!?!』

『俺は事件なんかより、蘭の方が大事に決まってるだろ!』

『だから…』

『そんな顔…すんなよ』

『…』

『新一』

『どうせ私を置いて、事件に行くんでしょ?』

新一は

困った表情をしていた

『仕方ねえーだろ!!』

事件が俺を呼んでんだからさ…』
俺は言い訳をした

…蘭の気持ちも知らずに
後で後悔することになるとも知らずに…

『あらそう』

『新一は私より、事件の方が大事なのね?』

蘭の顔がピクピクしていた

『あ…だから今のはそうゆう意味じゃなくて…』
違うんだ! 蘭!!
俺はお前か

何よりも大事で

世界一大切な存在なんだっ!!

…何て

言えたら、どんなに楽か…
『えっと…だから…その…だな…』

『もういい』

……

『へ？』

『新一なんて…』

『新一なんて…』

『お、おい』

『蘭？』 新一は慌てた

何とか

蘭を落ち着かせようと
考えたが
できなかった

蘭の言葉によって…

『もう知らない！…！』

そういうと蘭は
勢いよくドアをあけ

出て行ってしまった

俺は必死になって呼び止めようとした

『蘭！らーあん！！』

だか

蘭は振り向かずに
走って行ってしまった

…新一の…新一のバカっ！ハア…
ハア…

『そんなに事件が好きなら事件といれば良いじゃない！？』

……………。

『…大バカ推理之介』

（どうしてあんなこと…言っちゃったんだろう）
あんなことが
言いたかった訳じゃ
なかったのに…。

）

…新一を困らせてしまった。
(新一、傷ついたよね…)

今更

後悔しても、遅いのに…。

私は

ただ…

新一と一緒に居たかっただけなのに…

『ごめんなさい…』

新一…』

わがままな

私を…

許してくれなんて

言わない。

私は、貴方を傷つけてしまったから。

感情の念うままに

……

どうして私は、『素直』

になれないんだろう…？

新一に名前を呼ばれた時、振り向けば、良かったのかな…。

そうすれば

こんなことにはならなかった？

(……新一)

…逢いたいよ。

感情の念うままに（後書き）

感想・ご意見

お待ちしております！

~~~~~あなたに逢いたくて~~~~~

あの後、新一と別れた私は……。

自分の住んでいる家、

「毛利探偵事務所」に向かっていた。

（新一…

今頃、

どうしてるのかな？）

…事件は、どうなったのかな？

解決したのだろうか……。

頭に入<sup>づ</sup>って来るのは、「新<sup>二</sup>」の事ばかり……………。

彼が、私の頭の中を支配している。

逆に言えば、彼の事しか、

頭に入って来ない…

私の世界は、

全て「彼」で出来ているのだろうか？

……。

いや、「新」で出来ていると言っても、過言じゃないのかもしれない。

私の世界は、「新」で出来ている。

…出来過ぎると言えるほど……………。

貴方が居ない世界は、「世界」



じゃない……。

貴方が居なければ

私の世界は、失ってしまうものが多い。

だって、貴方が居ない世界は、色が失くなってしまっから  
。

もし、あなたが私を許してくれるなら……………、

私はあなたに遇いたい。

もう一度、笑顔で私に逢ってくださいませんか？

私は貴方に遇いたいです。

新一  
…。

気がついたら蘭は  
「毛利探偵事務所」に着いていた。

『…ただいまー……』

何気なく言ってみた言葉。

事務所に入ると、父親である毛利小五郎が、

沖野ヨーコのビデオを鑑賞しながら、お酒をぐいぐい飲んで酔っ払っていた。

『ムー・ムー・ヨー・ムー  
』

『いや〜。やっぱり、ヨーコちゃんの歌声はかわいいなあ〜！  
』

すっかり、ビデオの沖野ヨーコに夢中らしい。

それにしても、この歳でアイドルのファンとは、良いのか悪いのか。

『何言ってるんだよ？作者！良いに決まってる？』

なあーヨーコちゃん

『

（ああ、そうですか…）

『ひっくう……らあんちゅわーん……』

お帰り〜  
』

酔っ払った小五郎が何とも言えない声で言った。

ビールの空き缶がそこら辺に散らばっている。

一体、どれくらい飲んだのだろうか……？

…ビールの缶が、1、2、3、……。

すでに、4缶も飲んでいる。

今は、6缶目を飲もうとしている所だった。

いつもの蘭なら、『もー…こんな散らかしてー!』

『お父さんー!飲みすぎ!だから、お母さんが出ていちゃうのよー



「！！」

と、父・小五郎を叱っているのだが、

今の蘭は元気がない為、

小五郎を叱る気力すら残ってはいなかった。

『…蘭？』

小五郎も娘に違和感を感じたのか、真面目な顔つきになった。

『おい、蘭：  
何かあったのか？』

『ううん！何でもないよ、お父さん！！』

蘭は何とかごまかそうとしたが、父の前ではそうはいかなかった。

『蘭……。お前、あの探偵坊主と何か合つたろ？』

さっきまで、酔っ払っていた小五郎が嘘のように当てた。

『……………』

何もかも見透かすような目。

まるで、すべて「お見通し」と言っているかのような瞳で。



くあなたに逢いたくてく（後書き）

『ハア……。小説、難しいよぉ』（泣）』

『：文才がないくせに、趣味で書こうとするからこうなるんだよ！』

『だつてえ』（泣）』

『そんなことより、』

（そ・ん・な・事、より！？）

『何なんだよ！このストーリーはっ！』

『ああ…。心配せんでもええで？

ちゃんとハッピーエンドにするさかい！

安心しい！！なっ？

』

『そついう問題じゃねーよバーロ！』

（何で関西弁何だ？）

それでは、また次回も頑張ります！

『あつ、こら！逃げるな作者！！』

アンゴル・モア

くあなたに逢いたくてくくその2「涙」(前書き)

駄目文、よく分からないストーリーですが。

それでも読んでくださったら、嬉しいです！



くあなたに逢いたくて……その2「涙」

『蘭……。お前、あの探偵坊主と何かあったんだろ？』

『……………』

いつもの小五郎とは違う、

真剣な表情。

ごまかしきれないと考えた蘭は、

すべてを父親の小五郎に話すことにした。

『…お父さんの言う通りだよ……。』

『やっぱりそうか。』

『お父さん……。私ね、新一に酷いこと言っちゃったの……。』

涙を見られたくないため俯いて話した。

「蘭。今日起こったこと話せ。」

俺が全部受け止めてやるからよ…。

父の言葉に甘えて

『……っ。っ。っ。』

思いつきり泣いた。

蘭は小五郎に抱き着き、

『お父さん……グズ……あの……ね、グズ……グズ……』。

『……』

……

私……、新……一に……グズ……酷いこと……グズ……言っちゃっ……  
たの……！

私……、新……グズ……一を傷つけたの……。』

蘭は、新一との出来事を全て話した。

泣きながら、話す娘に小五郎はただ優しく、

『そうか…、そうか…。』

と、

頷きながら蘭の背中を優しく摩った。



蘭が泣いてから1時間後

蘭はようやく落ち着きを取り戻した。

『もう大丈夫か、蘭？』  
心配そうに小五郎が聞くと、

笑顔で蘭は返事をした。

『うん！もう大丈夫！』

お父さんのお陰よ！！』

『そうか…よかった。』

安心したのか、小五郎はほっとため息をした。

『蘭…あの探偵坊主と仲直りしないのか？』

『……………』

小五郎の発言に困ったのか、蘭は俯いている。

『いい、のかな…』

『ん？何がだ？』

『……私が、新一に会いに行っているのかなあ……？』

『馬鹿！！そんなの、良いに決まってるだろうがっ！』

『あの探偵坊主が蘭に逢いたくねえーなんて言ったら、俺が直接行って、

蘭の前に引きずり出してやるっ！！！！』

『お父さん……』

『……いいか？蘭。』

今のうちに謝つとかないと、

そのうち後悔することになるかもしれねーんだぞ？

『

『……………』

『蘭……お前は、後悔したいのか？ずっと気まぐれいままでもいいのか？』

どっちだ……。

『

『  
...  
』

蘭は考えた。

（私は…、  
）



蘭は新一の顔を思い浮かべていた。

「蘭！」

私は…

蘭は決心した。

『嫌だ！』

『このまま新一と気まぐれいままなんて…嫌っ！！』

小五郎の表情が微笑んだ。

『蘭ならそう言つと、思ったよ。』

蘭も父をみて微笑んだ。

『お父さん……。』

『何だ、蘭？』

蘭はクスッと笑った。

『なに笑ってんだ？』

さっきまで泣いていたと思ったら、突然笑う娘

小五郎は不思議に思い蘭を見た。

『ありがとう！お父さん！！』

娘のお礼の言葉に、小五郎は照れながら、

『うつるせえ…』と素っ気なく返事した。

父の素っ気ない返事に、

娘の蘭は笑った。

『くすくす…』

『ああ？何が可笑しいんだよ…』

『だって、ふふ…』

ふふふ…。

あはは、はは  
『

『お父さん！素直じゃないんだから…！』

(……)



やっと元気になったな。蘭…

温かい眼差しで、小五郎は呟いた。

時刻は7時。

小五郎は、『そろそろ腹減ったなあ…。』

蘭！早く飯作ってくれー！

『

と、お腹の鳴る音を聞きながら言った。

『はいはい！今支度するから、待ってて！！』

蘭はキッチンに行き、夕飯の支度を始めた。

そして、夕飯を食べ終え…

蘭達は布団に入ると、眠りに就いた。

くあなたに逢いたくてくくその2「涙」(後書き)

うーん…意味 不明？

感想お待ちします。



くあなたに逢いたくてくくその3 「園子の仲直りラブラブ大作戦！」 前編

更新です。

くあなたに逢いたくてくくその3 「園子の仲直りラブラブ大作戦!!」 前編

ここは「帝丹高校」

時刻、 7：30分。

学校の教室には、すでに生徒がちらほら居て、

お喋りをしている者も居れば、

本を読んでいる人も居る。

蘭が教室に入ると、新一はまだ来ては居なかった。

…もしかしたら今日は、事件で来れないのかもしれない…

…どんな顔で新一に逢えば良いんだろう…

「昨日は、ごめんなさい」  
とか

「私っ、言い過ぎた。新一の気持ちも考えないでっ！」

…とか言っで、新一に謝ればいいのかな？

(……………わかんないよっ…

私どっやって新一と仲直りすればいいのっ!？)  
(

蘭が重い悩んでいると、教室のドアがガラツと開き、

見慣れた茶髪の少女が元気よく入って来た。

『らん！おっはようー！』

茶髪の少女園子は、蘭に元気良く挨拶をした。

『おはよう、園子ー！』

『そういえば、昨日は旦那とどっだったの？』

ニヤニヤして園子は蘭に言った。

『へっ？昨日って、新一の事？』

できるだけ、

昨日の出来事を園子に話したくないっ。

惚けた表情でごまかすように言う蘭。

だが、さすが園子といったところだろうか……。

蘭の嘘を一瞬で見破った。

『蘭……。昨日、新一君と何かあったんでしょ？』



!?

それは――。

どうしよう…。このままじゃ、園子にばれちゃう…。

どうしても避けたかった。

親友の園子に、迷惑を掛けたくないからだ。

（蘭…。

あんたって子は

……………私たち、親友じゃない。）

どうやら、蘭の考えている事がわかったらしい。

『ごまかそうたって、無駄よ!!』

蘭の考えてることなんて…全部、お見通しなんだからねっ!!…!!』

『…園子。』

…駄目だ。

やっぱり園子に…、ごまかしは効かない……………。

…私だって、本当はごまかしたり、嘘突くのは嫌だ。

『園子…実はね、昨日……。』

蘭は昨日、何があつたかのか、園子にも話した。

『……って事があったんだ。  
昨日……』

『……………』

『ねえ……。』

『園子……、私どうやって新一に謝れば……』

バンッ……………。

蘭が話し終える前に、園子が蘭の机を思いっきり叩いた。

教室にいる生徒全員が、ビクッとして驚いている。

皆、一斉に園子を見た。

『……………何で？』

『えっ………』

シーンと静まり返った教室。

蘭と園子の声がやけに大きく、響いた。

『何でそんな大事なこと、  
もっとはやく言わないのよっ!?.』

『...』

園子の言葉に、蘭はしばらく黙った後、

重い口をようやく開いて、  
答えた。



『コメンね。園子……。』

『……。んじゃない……。』

『？』

……。うへっ。

みんなは唾を飲んだ。

園子はいったい、何を言おうとしているのだろうか…。

『私は蘭に謝ってほしいんじゃない!!!』

…私はねえ……。

蘭にもっと早く言って欲しかったのよ!?!』

『園子。』

『……ねえ？』

蘭。

私達、親友じゃない！

『

『それとも、この園子様が信用できないって言うの!?!』

『違うよ、園子。』

別に園子が信用出来ないとか、そんなんじゃないよ……』

蘭は、首を横に振った。

『じゃあ、どうして...?』

園子は瞳を潤め、蘭に聞いた。

『迷惑、掛けたくなかったから!』

『園子に迷惑掛けたくなかったから、言えなかったの……。』

園子には……言いたくなかったの。

新一との事……。

『

『バカね……』

『ば、馬鹿？』

園子の発言に、驚く蘭を余所に、

園子は続けて言った。

『さっきも言ったけど、私達、親友なのよ？』

『園子。』

蘭は眼を見開いた。

『水臭いわね…』



迷惑掛けたくない？

あのね！蘭。

私にとっては、言わないより、  
ちゃんと言ってくれないほうが迷惑なのよ！！？

『

『…苦しいときや、辛いとき話し合って助け合つのが、親友じゃないの…！

私はいっただって蘭の味方なんだから、心のなかに悩みを溜め込もうとしちゃ駄目！

…蘭、今から園子様に隠し事はNGよ？

私、蘭に対して迷惑なんて思わないからっ！』

（園子…）

『ありがとう。園子！

…そうだよね。私達、親友だもんね。

困ったときは、お互い様よね。

私、大切なこと忘れてた。

園子のお陰で、思い出したよ！

ありがとう、園子。』

『まーね。

でも、よかった。蘭が新一君とのこと話してくれて…。

このまま問題放置してたら、ずっとギクシャクしたままだったかもしれないし、

万一、

新一君と蘭が別れるなんて事になったら…。

まあその前に、

あの男が蘭と別れるなんてこと、絶対しないと思うけどね。

」

「…そう、かな？」

「そうよ。絶対！」

何てったって、新一君は蘭に夢中なんだから！

、一途なあいつが、蘭以外の女を好きになるなんて事

天と地がひっくり返ってもないから!』

『もう…。園子ったら。

』

『あの…お取り混み中申し訳ないけど、そろそろホームルーム始め  
……』

そんな担任の声を遮るように園子は言った。

『それより、蘭！』

新一君と仲直りしたいんでしょう？』

『う、うん。』

（先生困ってるけど、良いのかな……。）

『それなら、良い考えがあるわよっ！』

ウィンクして園子は言った。

『それって？』

何だろ……。良い考えって。

『名付けて…』

『？』

『蘭と新一君！仲直りラブラブ大作戦よっ！』

『なっ、仲直りラブラブ大作戦ー！？』

園子のことだから、何を言うのか、多少覚悟していたけど…

な、何を考えてるのかな？園子…。

いろんな意味で、不安になった蘭。

一体、どんな作戦なのだろうか？

誰もが気になって、もはやホームルーム所じゃない。



どうしようも出来ずにいる担任の先生は、ため息をした。

『そう…。まずは、二人が仲直りするきっかけを作るの。』

白馬に乗った王子、新一君が姫、蘭の元へ謝りに来るのよ…。

『

…あのっ、園子？』

意味が解らない蘭は、焦っている。

〈回想〉

「姫…。」

昨日は、姫との約束を果たせず、申し訳ありませんでした…。」

「どうか、私のご無礼をお許してください。」

「……嫌よっ！王子の嘘つき……！」

……私、

ずっと貴方との約束を楽しみにしてましたのに……。

うっ……うっ……。」

『………そ、園子おっ！？』

蘭は顔を赤くして、必死に園子の演技を止めようとするが…、

園子に蘭の声は届かなかった。

完全に一人二役を演じている…。

こうなった彼女を止められるものは、誰ひとり居ない。

「本当に申し訳ありません。」

…姫…。

許してくれとは言いません…。

ですが、姫…。

そんなお顔をしては、せっかくかわいい姫が台なしですよ…？

「……王子／＼／＼。」

「では、私は城へ戻ります。」

姫も早くお城へお戻りください。

この辺は、物騒です。姫にもしものが合ったら、大変ですから…

「

「姫…さようなら。」

「

「待つて。王子!」

「!？」

「姫／／／」

蘭姫は王子の頬にそっと、口づけをした。

「私が悪いのっ…。」

…だから、行かないで！！

王子…。

「

「姫…」

「王子…」



『そして二人は、深い口づけをかわし、

見事仲を取り戻したのです……』

『はあ……。めでたしめでたし。』

ようやく話し終えた園子。

やっと自分の世界から、帰ってきたようだ。

『何がめでたし、めでたしよっ！！！！』

頬を赤らめて怒る蘭。

だが、園子はお構いなしに笑って蘭に言った。

『そんなに怒んないのっ！』

冗談よ、冗談。

嘘に決まってんでしょ？

もしかして、本気にしたの？ 蘭？

『

どうやら、園子は蘭をからかっていたらしい。

その証拠に、ニヤニヤしている。

『ちっ、違うわよ／＼／＼／

何で私があんな奴と……。

ㇿ

ガラッ  
…

蘭が何かを言おうとしたその時、

教室のドアが開き、先生が入って来た。

…さっきの先生は、職員室に行ったらしい。

『皆席に座れ！授業はじめるぞー！！』

先生全員は、『ええー！！』と不満の声をあげ渋々席についた。

くあなたに逢いたくてくくその3 「園子の仲直りラブラブ大作戦！」 前編

感想・お待ちします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0845ba/>

---

素直になれなくて

2012年1月10日17時48分発行